特定非営利活動法人　外交政策センター
FOREIGN P●LICY CENTER

FPC Commentary

FPC Commentary Vol. 21　　２０２２年　４月　１日発行　価格100円

戦争は人の心の中から始まる

ジャーナリスト・キャスター　蟹瀬 誠一

ロシアのウクライナ侵攻が続く中、ドキュメンタリー映画『Winter On Fire』（2015年、ウクライナ・米・英共同制作）が再放送されて話題となっている。

2013年11月18日から翌年2月23日までウクライナの首都キエフで起きた「マイダン革命」と呼ばれた流血の反政府運動を93日間に渡って記録した迫真のドキュメンタリーだ。

武装した治安部隊との衝突で多くの市民が犠牲になっても独裁者に立ち向かったウクライナ市民の勇姿が生々しく描かれている。映像の中には、国を食い物にした親ロシア派のヤヌコビッチ大統領が密かにロシアに逃亡する姿もあった。

じつは、ロシアのプーチン大統領のウクライナ戦争はこのキエフ騒乱から既に始まっていた。

ウクライナはロシアの一部だと信じて疑わないプーチンにとって、ヤヌコビッチ追放は到底許せることではなかった。しかも後継者がオリガルヒ（新興財閥）で反政府デモを支援したポロシェンコだったからなおさらだ。

激怒したプーチンは「ロシア系住民保護」を口実にクリミア半島に侵攻し、一方的に併合した。すると彼のロシア国内での支持率は８割まで急上昇。帝政時代からクリミアはロシアの宗教・歴史・文化の聖地だと思っているロシア国民が多いからだ。

さらにウクライナ東部の紛争地域ドンバスにも「平和維持」のためと称してロシア軍を送り込み新政権に揺さぶりをかけた。

2015年2月、東部紛争を巡る停戦合意、いわゆる「ミンスク合意」がようやくまとまった。だがその後もウクライナ政府軍と親ロシア武装勢力は戦闘と停戦を繰り返した。

一方、反ロシア一辺倒のポロシェンコ政権に愛想を尽かしたウクライナ国民は、2019年の大統領選で政治経験のないコメディ俳優ゼレンスキーを選ぶ。

だが、それが戦争の火種を燃え上がらせる結果になるとは誰も予想できなかった。

当時、ゼレンスキーは政治風刺テレビドラマ『国民の僕（しもべ）』で主役を演じ大人気だった。さえない高校教師がひょんな事から大統領に選ばれて腐敗政治と闘う話だ。

ゼレンスキー陣営は『国民の僕』を政党名にし、腐敗政治に怒る国民が劇中の大統領のイメージと現実のゼレンスキーを重ね合わせるようにしむけて、国民の期待を膨らませた。番組は選挙直前まで放送された。

じつは、放送したテレビ局のオーナーはポロシェンコに私怨をもつオルガルヒ(新興財閥)のコロモイスキーだった。彼は同じユダヤ人であるゼレンスキーを裏から支援していたのである。

しかし、実際のゼレンスキーは高級車を乗る金持ちで、政治経済の知識が乏しかった。ドラマのようにはウクライナが直面する問題を解決できず、支持率は２０％台まで低迷した。

当初、ゼレンスキーは東部紛争の停戦履行に積極的だった。そのため国民、とくにロシア語圏の東部や南部で、ロシアとの関係改善への期待が高まった。

だが民族派から突き上げられた彼は反ロシア・ナショナリズムに転じてしまう。「ミンスク合意」を反故にし、親ロシア派の武装勢力が占領する東部地域の独立を拒否したのだ。

それだけではない。ウクライナ政府軍が親ロシア派勢力の攻撃に初めてトルコ製ドローンを使った映像まで公開した。「ロシアの挑発に乗るな」と欧米は苦言を呈したようだが、ゼレンスキーは「領土と主権を守る」と強気だった。

それがロシアを刺激しないわけがない。

2020年秋に戦闘が再燃した旧ソ連圏の係争地ナゴルノカラバフでアゼルバイジャンが親ロシアのアルメニアを破った「秘密兵器」がトルコ製ドローンだったからだ。さらにゼレンスキーはトルコ製ドローンの調達を進め、トルコと共同開発にも合意したという。

否が応でも緊張は高まった。

２０２１年３月、ウクライナ国境付近での演習を終えたロシア軍はその後も留まり続けた。当時約４０００人と推定された兵力は４月中旬には１０万人以上に膨れ上がった。

そして運命の２月２４日、ロシア軍は３方面から猛攻撃を開始。誰もが予想していなかった世界を震撼させる容赦ない無差別全面攻撃が始まったのである。

ゼレンスキーは国民総動員令を発して１８歳から６０歳の男性市民の出国を禁止し、ロシアとの徹底抗戦を訴えた。テレビ局は火焔瓶の作り方を教える番組を流し、危険承知で外国人義勇兵まで募集している。

ネットメディアを巧みに使い、カーキ色のＴシャツ姿で現れたゼレンスキーはそれまでの不人気から一転して「英雄」扱いされるようになった。背後にメディア戦略に長けた組織が存在するのではないか。

ウクライナ軍は大方の予想外に強い抵抗を見せた。しかし、その代償は大きい。

凄まじい破壊と殺戮である。現地メディアによるとロシア軍の無差別攻撃で南東部の港湾都市マリウポリだけで５０００人以上の民間人が死亡したという。

停戦交渉が繰り返されている。だが北極熊と野ウサギのように力の差があまりにも大きい２者の争いの仲裁は極めて難しい。平和実現のために弱者は妥協を強いられ、強者の国際法違反はうやむやになることも多いのが現実だ。

ロシアの攻撃が止まない背景にはいくつか理由がある。

ひとつは世論調査で過半数のロシア国民がプーチンの行動を支持していること。そして西側が武器と資金を送り込むだけで、実際の戦場にはウクライナが取り残されていることだ。

さらには、エネルギー資源や穀物をロシアに依存するＥＵ諸国が制裁に腰が引けていること。中間選挙を控えたバイデン米政権が戦術核使用も辞さないロシアと本気で事を構えたくないこともある。

首都キエフのニュースサイト「ウクライナの新しい声」編集長のベロニカ・メルコゼロバは言う。「プーチンはウクライナを独立国だと思っていない。だから欧州の自由な国として存続させるくらいなら破壊したいと思っている」と。

その言葉が事実なら、無益な戦争はまだ続く。

厄介なのは現代の戦争が武力だけでなくサイバー戦、情報戦などを組み合わせた「ハイブリッド戦」になっていることだ。とくに情報戦による隠蔽や「偽旗作戦」によって真贋を見分けることが極めて困難になっている。

それは取りも直さずジャーナリズムの真価が問われるところでもある。

戦争は人の心の中で始まる。戦争に完全な善もなければ悪もない。ただあるのは勝者と敗者、そして憎悪と深い悲しみだけだ。ロシアの無差別な殺戮は決して許されないが、単純に勧善懲悪の構図だけで国際紛争をみるのは危険だ。（終）

発行: 特定非営利活動法人　**外交政策センター Foreign Policy Center (FPC)**
〒111-0032 東京都台東区浅草3-37-5-902
定価: 100円 Eメール:foreignpolicy617@gmail.com
ホームページ：https://www.foreign-policy-center.tokyo/fpc7.org/
Facebook：https://www.facebook.com/fpc.gaikoseisaku/